

第6回男女共同参画シンポジウム報告 “子育てしながら化学する”—若手研究者・大学院生を対象に—

男女共同参画推進委員会

桜が咲き始めた平成18年3月29日(水)、日本化学会第86春季年会(日大理工学部船橋キャンパス)において、男女共同参画推進委員会主催による第6回シンポジウム“子育てしながら化学する”(若手研究者・大学院生に向けて)が実施された。シンポジウムは基調講演3件と座談会からなり、熱い意見交換は、ミキサー終了時まで続いた。藤嶋昭会長は、開会の辞で道元の「霧の中を歩めば覚えざるに衣湿る」を引用し、男女共同参画には雰囲気づくりが必要と強調された。

基調講演は、野村淳子氏(東工大)の「子供と一緒に化学する」から始まった。研究と育児の両立法は様々であるが、同氏は研究室滞在、研究室旅行、国際会議同伴等の密着型スタイルを紹介された。氏はこのスタイルについて、長所と短所に分けて考察。忙しいけれど、充実し、楽しい。そして、「ぼくのママはなんでも教えてくれる」は心の支えであると。

かつこつけずに、周囲のみなさんをお願いすることが、働きながら育児する人への理解につながる。次に、寺崎朝子氏(千葉大)の「女性研究者に必要な環境」。3人の子供を育てた経験から、現状と展望についてお話された。女性研究者の現状は、砂利道を、子供を背負い、研究、大学運営という箱を引きずりながら走るようなものである。よい仕事をさせる視点から、国全体として育児支援に取り組む、分業や時間労働制の導入、お手本や励まし合える仲間などの精神的支援があるとよい。種々の環境整備により、砂利道が少しずつ舗装されれば、女性は走ることができる。最後に、野崎京子氏(東大)は「女子学生たちの不安」について見事な両立研究者12年の経験からアドバイス。出産・育児をしながら働くことの不安に対しては「お互いさま」を心の支えに、後進のため各種制度を利用して道を広げて欲しい。薬品使用が胎児に及

ぼす影響を心配する人もいるが、危険な物質に対してはいつも注意しているはずであり、酒、タバコの害の方がもっと大きい。子育てしながら化学するコツは、長い時間のスケールで自身の人生を考え、要領が必要。

座談会「子育てと研究を両立するために必要な

こと」には岩田耕一氏(東大)、新井(鮎澤)亜沙子氏(東大)、木谷佳子氏(阪大)、ゴトバツ・スザナ氏(千葉大)、稲垣明子氏(東工大)、吉田朋子氏(名古屋大)、田中千穂氏(三井化学)が参加して下さった。変貌を遂げている企業は勝ち残るために生き方の多様性に対応し始めた。ヨーロッパの大学では時間労働制が古くから整備されており、普通に研究と育児をする事例が紹介された。ある国にはそもそも残業に対応する言葉さえないという。

文部科学省は今年度から女性科学者育成支援を始めたが、現場では男女共同参加の盛り上がり欠ける面もある。まずは女性研究者の数を増やすことが課題である。組織構成の世代交代にも期待したい。忙しい育児期の女性が情報交換をして、種々の問題点を乗り越えるには、ネットトークなども必要である。男女共同参画の推進には、各組織の枠を越えて地域と連携することも必要であり、女性が住みやすい社会は男性にも住みやすい社会になる。男女共同参画社会の実現をめざす雰囲気を盛り上げるために、学会は今後も活動を続けていくことが肝要である。「継続は力なり」。

[文責：森 義仁(お茶大理)]

©2006 The Chemical Society of Japan

